

と予想される。

現在のセンター業務において、課員の業務負担の増大は、新たな取り組みへの阻害要因になり得る。当面は、現状の人員をもってすべてを管理する体制を維持し、不十分な部分は、システム導入時の保守契約に基づく委託管理の利活用で補完する方針である。今後は、業務のさらなる効率化を図り、本学の ICT 環境の中核を担う情報処理センターの運営に支障が出ないよう努力したい。

(四) 国際交流委員会

(1) 国際交流の組織と位置づけ

国際交流を担当する組織として法人に「国際交流委員会」を設けているが、この委員会には、大学 4～5 名、短期大学部 1 名、附属高等学校 1 名、事務局 1～2 名の各委員で構成される。委員会の審議事項は大学各学部及び短期大学部の教授会、並びに附属高等学校で報告を行い、全学的な方向を共有している。

この委員会の活動を支える事務は学術支援機構事務部が全体として担当していたが、支援体制の更なる充実を図るため、平成 20 年 10 月 1 日より新たに学術支援機構の中に「国際交流支援室」が設置された。

(2) 国際交流活動

国際交流活動の中心は、協定校との連携による学生の短期語学研修、学生の交換留学、教員による集中講義、教職員の相互訪問、教育・研究情報の交換などである。平成 20 年 9 月 30 日現在本学は 5 ヶ国 11 大学と姉妹校・協定校関係にあり、平成 20 年度には、新たに青島科技大学（中国）、北華大学（中国）及びキングモンクット工科大学（タイ）と学術協力協定を締結した。（巻末資料 31 参照。）現在、さらに 2～3 の大学との学術協力協定の締結準備が進行中である。

(3) 交流協定校との交流活動実績（詳細は巻末資料 32、33 参照）

(イ) 海外英語研修

平成 16 年から米国カリフォルニア州立大学イーストベイ校（CSUEB）にて夏期集中英語研修を実施しており、大学院生及び短期大学生を含めて学生の英語研修及び異文化体験の場を提供している。

この学生の中から、CSUEB の特別奨学生プログラム（最大 1 年間の現地授業料免除）への参加があり、平成 20 年度までに合計 4 名の学生が派遣されている。

(ロ) ダブルディグリー（二重学位）プログラムの開始

南京理工大学（中国）の大学院とは、大学院合同プログラムが開始され、平成 20 年度から 2 名の大学院生を学納金免除の特典を与えて本学に受け入れている。このプログラムは、南京理工大学での 6 ヶ月及び本学修士課程での 2 年間に所定の課程を履修し、所定の論文審査に合格すれば本学の修士号を授与するが、その後現地の所定の審査を経て南京理工大学の修士号も併せて二重に授与されるというダブルディグリー制度となっている。

(ハ) 韓国の姉妹校からの科目等履修生の受け入れ

韓国の交流校である亜洲大学から科目等履修生として、学納金免除の特典を与えて、平成 16 年度から平成 20 年度前期までに合計 20 名の学生を受け入れている。

(二) 韓国の姉妹校での夏期集中研修

韓国での姉妹校である亜洲大学校と慶星大学校での約3週間の夏期研修を本年度より本格的に開始し、亜洲大学校に1名、慶星大学校に3名が参加した。

このプログラムは、海外の姉妹校からの学生を夏休みに招聘して開催されているもので、多数の学生が参加しており、異文化コミュニケーションの場となった。講義は基本的に英語で実施されるが、韓国語の勉強、歴史、経済事情などの学習はもとより、韓国の文化、料理、ホームステイ、観光地視察などバラエティに富む内容となっている。

(ホ) 北華大学（中国）及びキングモンクット工科大学（タイ）との連携

平成20年3月にキングモンクット工科大学、平成20年4月に北華大学と学術交流協定を締結し（巻末資料33）、今後各種交流プログラムを実施する予定である。特に、北華大学とは、平成20年9月に「日本語センター」を開設し、日本語の集中講座を提供し、現地で実施する入学試験に合格した学生を学部生として本学に受け入れるという共同プログラムを立ち上げており、平成21年度から第1回目の学部学生が入学する予定である。

(点検・評価と改善策)

本学の国際交流は、学術交流としては地理的近接により、主として中国及び韓国の交流協定校、学生の語学研修については米国の交流協定校との間で長年実績を積み上げてきたものの、社会の国際化の動きに十分な対応を果たしていない面もある。

この反省に基づき、平成20年10月より、組織改正により「国際交流支援室」が新たに設置され、本学の国際交流を管掌する体制が整備された。また、平成21年度からは「国際交流会館」を設置し、留学生受け入れ体制等の強化を図るための準備が進行中である。

さらに、タイのチュラロンコン大学も新たに姉妹校に加えて、グローバル化に対応した多様な交流プログラムを提供できるようにする計画が進行中である。

今後は、協定大学及び提携大学からの学生を中心に優秀な留学生を本学に受け入れる全学的システムを構築する必要がある。併せて、多様な国際交流プログラムを通じて、語学力のある国際的視野を持つ学生を養成する為の有効な施策を実行に移していく必要がある。現在、そのための基盤作りを進めつつある。